

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	きらめき宜野湾		
○保護者評価実施期間	R8年2月3日		～ R8年2月28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	2	(回答者数) 1
○従業者評価実施期間	R8年2月3日		～ R8年2月28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数) 7
○事業者向け自己評価表作成日	R8年 3月 10日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	児童一人ひとりの状態や活動内容に合わせて、物理的な環境(部屋の使い分け)や支援アプローチ(自己決定の促進)を柔軟に変化させている点。	活動内容を視覚化したり、時計を工夫したりすることで、児童が「次に何をすべきか」を自分で理解できる環境を構造化している。また、パニック時や休息が必要な時のために「静かに過ごす部屋」を確保し、無理強いせず児童の意思(自己選択)を尊重した声掛けを徹底している。	現在の「環境の工夫」をマニュアル化し、どの職員が担当しても同じレベルで環境設定ができるようにする。また、児童の自己決定の幅を広げるため、選択肢の提示方法(絵カードの活用等)をさらに多様化させる。
2	朝礼や会議、ヒヤリハット報告などを通じて、児童の小さな変化やリスク管理に関する情報を迅速に共有し、PDCAサイクルを回そうとする組織風土。	勤務時間内に受講できる動画研修や、外部講師を招いた個別支援計画作成の研修など、職員が学び続けられる機会を積極的に確保している。また、ヒヤリハットはその都度記入し、速やかに職員間で共有して再発防止に繋げている。	内部研修だけでなく、今後は外部研修への派遣もさらに増やし、職員の専門スキル(アセスメント技術等)の底上げを図る。研修報告会を実施し、学んだ知識をチーム全体で定着させる仕組みを強化する。
3	送迎時の対面コミュニケーションに加え、デジタルツール(公式LINE・ブログ等)を併用することで、家庭との双方方向かつ透明性の高い連携ができています。	日々の活動の様子を写真付きで発信し、事業所での様子が保護者に伝わるよう配慮している。また、保護者交流会を定期的に企画し、家庭の悩み相談や保護者同士の横の繋がりを支えを継続的に行っている。	現在「あまり理解できていない」という意見があった運営規定や支援計画の説明について、より分かりやすい図解資料や動画等を作成し、保護者の納得感を高める説明スタイルを確立する。また、交流会の開催頻度を増やし(年2～3回)、より多くの保護者が参加しやすい環境を作る。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	標準化された評価ツールを用いた客観的なアセスメントが不足しており、支援員の主観や経験に頼った「インフォーマルな情報共有」が主となっている。	日々の活動観察や家庭からの聞き取りに重点を置きすぎており、専門的な評価指標を導入・活用するための体制やノウハウが十分に整っていない。	標準化されたアセスメントツールを導入し、支援員間での評価基準を統一する。定期的なケース会議での活用を徹底し、根拠に基づいた個別支援計画の作成を目指す。
2	シフト勤務の影響で、朝礼や会議に参加できない職員への情報共有に漏れが生じている。また、虐待防止研修等の専門知識が全職員に均一に浸透しきれていない。	対面での伝達に頼りすぎており、全員が揃わない時間帯の職員に対する「周知の仕組み」や、不参加時のフォローアップ体制が構築できていない。	ICTツール(公式LINEや業務ソフト等)をフル活用し、不参加者も必ず確認できるデジタル記録による周知を徹底する。理解度が不足している職員には、個別の面談や会議での再共有など重層的な伝達方法を検討する。
3	第三者による外部評価を実施できておらず、客観的な視点での事業運営に欠ける。また、地域(児童館、他事業所、児童発達支援センター等)との具体的な連携や交流がほとんど行えていない。	現状の事業所内での支援業務に手一杯となり、外部の専門機関や地域社会との「つながり」を持つための企画や働きかけが後回しになっている。	まずは他事業所の取り組みを参考にし、第三者評価の受審に向けて準備を進める。地域交流については、近隣の児童館や放課後児童クラブとの共同企画を具体的に提案し、地域に開かれた運営を目指す。